

# 科学哲学の科学への応用は誰の仕事なのか

両者の協働領域を探索する科学者側からの提言

新納美美（北海道大学）

科学哲学で培われた知識を、科学分析や政策的決定等に積極的に活用しようとする傾向が近年になって認められる。米国では哲学的因果論が科学分析と政策決定の両者に応用され、協働関係が築かれつつある。我が国でも、倫理や価値については科学哲学者と科学者に協働の動きがみとめられ、哲学者側が実証的な研究活動に歩み寄る動きもみられる。

しかし、科学哲学の科学への応用や、両者の協働には課題が認められるのも事実である。科学哲学者と科学者双方の関心の“すれ違い”が指摘されている（Kourany, 2004）ように、科学哲学者による科学的知見の解釈には時に違和感を覚えるものもある。哲学的因果論の科学への応用に関する議論を進める N. Cartwright も、一方では唯一の因果法則を求め続ける哲学者としての心性を固守しているかのように見える（Cartwright, 2007）。はたして、科学哲学の科学への応用は学問的な発展の方向性として適切なのだろうか。学問領域固有の知識形成の方向性や方法論の違いがある中で、“応用”の名のもとに展開される協働関係は、各々が拠って立つ学問領域に利益と発展性をもたらすものになるのだろうか。

本提題者は、看護学分野において科学研究を続けて来た。近年になって看護学者が科学哲学者の論を参照したり、科学哲学者が看護学分野に目を向けたりするようになってきているが、協働は進んでいない様である。その背景には、やはり両者の関心事の不一致があるように感じられる。今回は、*International Journal of Nursing Studies* に掲載された哲学的因果論の応用に関する議論（Persson & Sahlin, 2009）を素材に、科学哲学者の主張に対して科学者として覚える違和感を提示する。その上で、科学哲学の科学への応用や科学者との協働に伴う課題とその解決策について提言したい。